

メッセージアウトライン

コロサイ人への手紙 4:12~18 「最後のあいさつ」

[12-13] 「あなたがたの仲間のひとり、キリスト・イエスのしもべエパfrasが、あなたがたによろしくと言っています。彼はいつも、あなたがたが完全な人となり、また神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるよう、あなたがたのために祈りに励んでいます。私はあかしします。彼はあなたがたのために、またラオデキヤとヒエラポリスにいる人々のために、非常に苦勞しています」

エパfras…彼はコロサイ教会で人々を教える立場にあった人である。→コサイ 1:7 彼は教会の様子をローマの獄中のパウロの所へ知らせに来て、そこで捕らえられて囚人となり、パウロとともにいた。→ピレモン 23 彼は近くのラオデキヤ(コサイから北西約 10km)、ヒエラポリス(ラヂ^{ラヂ}の北東約 5km)の教会のためにも非常に苦勞している人物であった。彼は教会間を巡回して教えていたのであろう。彼はコロサイ教会の人々が完全な人、すなわちキリストにあって信仰的に成熟した人となり、神のすべてのみこころを十分に確信して立つことができるように祈りに励んでいる。(創世記のヤコブのように神と格闘するように祈りに励んでいる→創世記 32:24~29) 彼はみことばを教えることと、祈りに励むことにおいて牧会者の模範のような人物で、彼こそ真のキリスト・イエスのしもべであった。

[14] 「愛する医者ルカ、それにデマスが、あなたがたによろしくと言っています」

ルカ…彼はパウロの第2回伝道旅行の途中から同行するようになり、それからずっと行動をとともにしていた。彼は医者であったが、その職を投げ打ってパウロに従った。彼はパウロの主治医、また同労者として最後までパウロとともに奉仕の生涯を送った。→IIテモテ 4:11 「ルカの福音書」と「使徒の働き」は彼の手によって書かれた。

デマス…彼の名前はピレモン 24 にも出て来る。後にパウロの最後の手紙となったIIテモテ 4:10 では彼が今の世を愛し、パウロを捨ててテサロニケへ行ってしまったと書かれている。デマスの姿にイエスを裏切ったイスカリオテのユダの姿が重なるのではないだろうか。パウロの心の痛手は大きかったことであろう。

私たちはイスカリオテのユダやデマスではなく、ペテロのように失敗しても悔い改めて主に従っていく者とならなければならない。

[15-16] 「どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回ってくる手紙を讀んでください」

ここでパウロはコロサイに地理的に近いラオデキヤの教会へのあいさつを頼んでいる。「ヌンパとその家にある教会」とはラオデキヤの教会がこの家の教会であったか、あるいはその一部がヌンパの家で集会を持っていたと考えられる。当時キリスト教の教会堂とい

うものはなかったの、信者の家がそれぞれ教会であった。そして合同の時は屋外で集会をしたようである。

パウロが書いたこのコロサイ人への手紙は単にコロサイ教会のためばかりではなく、回りの教会へも回覧して読まれるべきものであった。それは語られていることが福音の普遍的真理だからである。

「ラオデキヤから回ってくる手紙」もパウロから諸教会へ送られた数々の手紙のうちの一つであったろう。

この手紙は今では失われているが、しかし本質的なもの、福音、神に仕え、生き、かつ成長していくために必要なものはすでに完全に結実した聖書として私たちに与えられている。歴史の移り変わりにかかわらず、神の摂理はキリストの真実な福音を保存してきたのである。

[17]「アルキポに、『主にあつて受けた務めを、注意してよく果たすように』と言ってください」

アルキポはピレモン2では「戦友」と呼ばれている。彼はピレモン家の一員であったと思われる。彼はエパfrasの留守中、牧会伝道の働きに当たっていたと考えられる。しかし、彼は他人から励まされなければ前進できないようなタイプの人であったのかもしれない。それゆえ、パウロはアルキポに「主にあつて受けた務めを、注意してよく果たすように」と激励したのであろう。

[18]「パウロが自筆であいさつを送ります。私が牢につながれていることを覚えていてください。どうか、恵みがあなたがたとともにありますように」

パウロは手紙を書くときは代筆者を使っていた。→ローマ16:22 これは彼があのだマスコ途上で復活のキリストに出会ってまばゆい光に照らされて以来、目の弱さを覚えていたからではないかと考えられている。→使徒9:1~18 しかし、手紙の最後では本当にパウロ自身の手紙であることを明らかにするために自筆で別れの挨拶を書いたのである。→Iコリント16:21,ガラテヤ6:11,IIテロコケ3:17,ピレモン19

彼は今、ローマの獄中にいるが、そのことを忘れてしまうような明るく力強い内容の手紙であった。そして彼は祝福を祈って終わる。

彼はキリストの福音のゆえに牢につながれているのであるが、鎖でつながれていても、神のことはつながれてはいない。獄中で書かれた福音のことは今や大量に印刷され、あるいは電波に乗り、また電子媒体を通して、また口から口へと宣べ伝えられ世界中を駆け巡っている。

私たちは福音伝道のためにその一生を費やし、獄中でも人々を励まし、また祝福を祈る人の姿をここに見る。それはまた、人々の罪のために十字架を負って苦しみ、死なれたイエス・キリストの弟子としての姿である。

私たちがイエス・キリストにあつて救われた者、キリストの弟子として、各々の十字架を負いつつ、それぞれの置かれている場所で福音を宣べ伝える者になりたい。